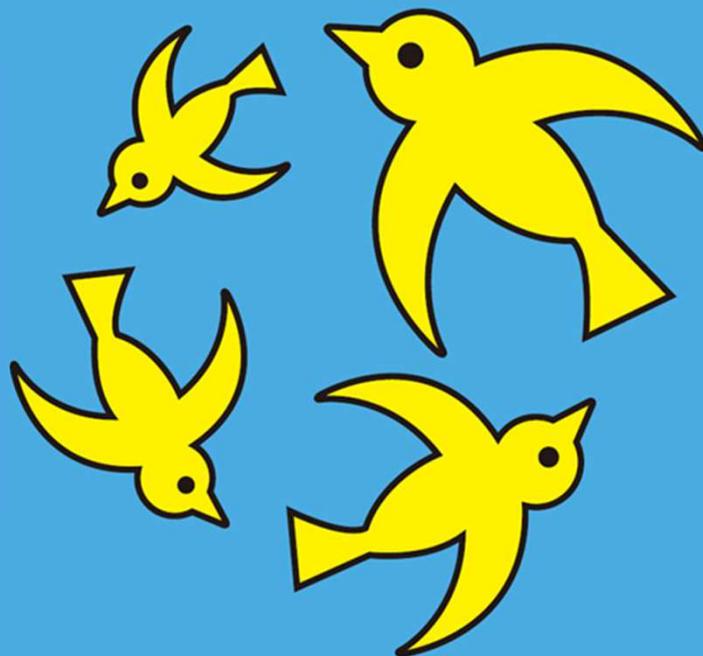


生きる力

学びの、その先へ



徳島県 令和6年度 学力向上推進員研修会 R6.6.14

学習指導要領の趣旨の実現に向けた授業づくり ～読解力の育成・学力向上を目指して～

文部科学省 初等中等教育局 教育課程課 教科調査官
国立教育政策研究所 教育課程研究センター 研究開発部 教育課程調査官
大塚健太郎



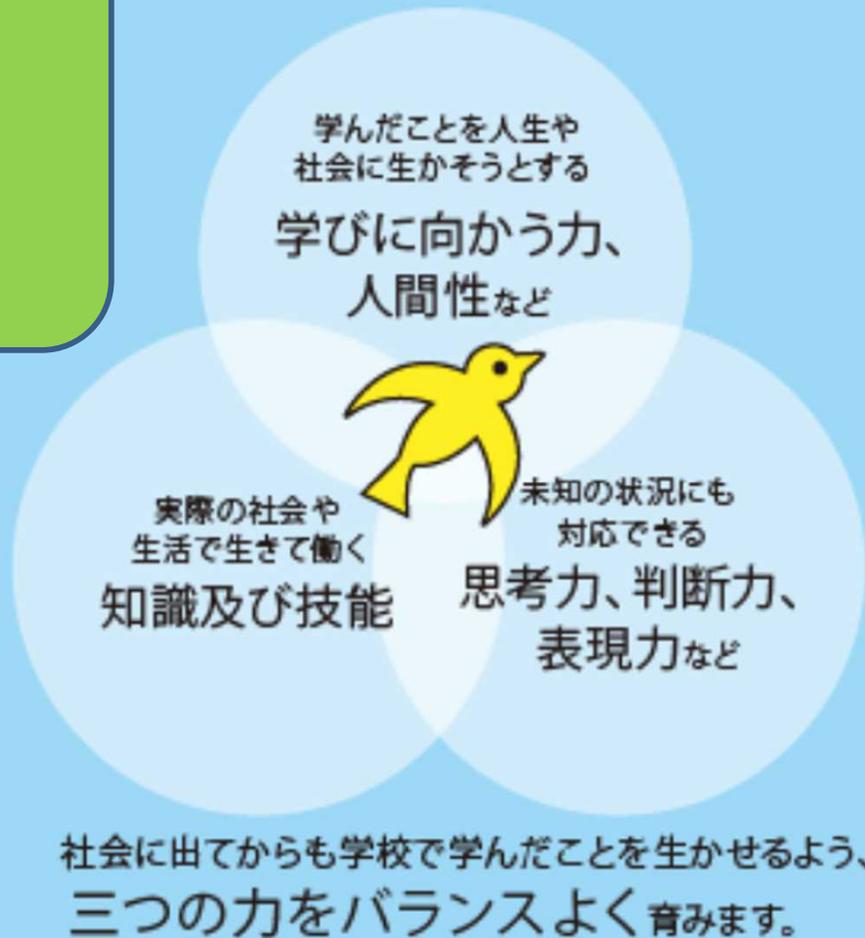
今、求められている授業を次のように捉えると

- 学習指導要領（資質・能力の育成）
- 主体的・対話的で深い学び
- 指導と評価の一体化
- 個別最適な学びと協働的な学び
- G I G A スクール構想 等

これらが生まれた背景を考えると、
何故求められているのか見えてくるはず



何を目指し、
三つの柱に
整理されたのか

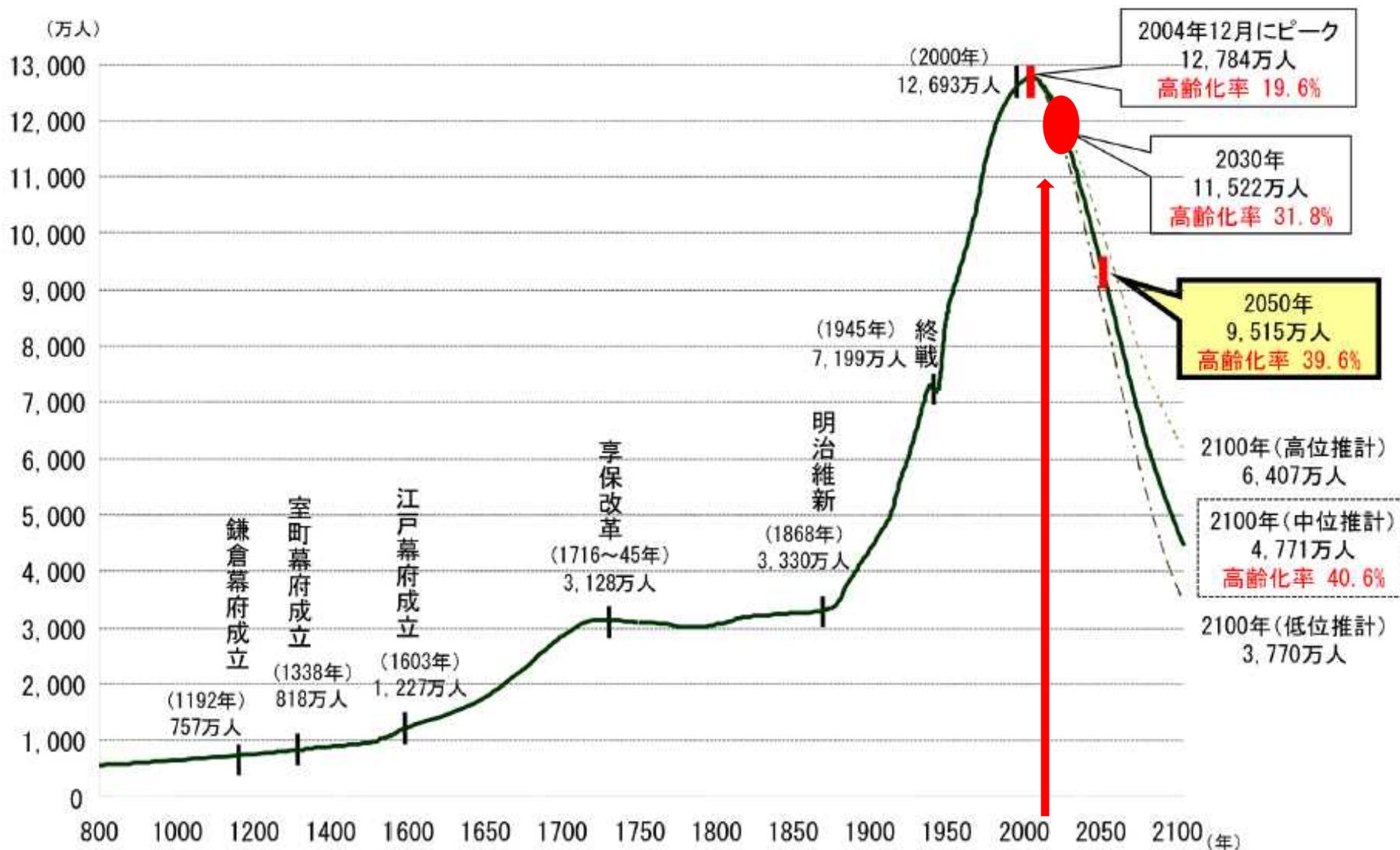


全面実施5年目です



一人一人の児童が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようにすることが求められる。

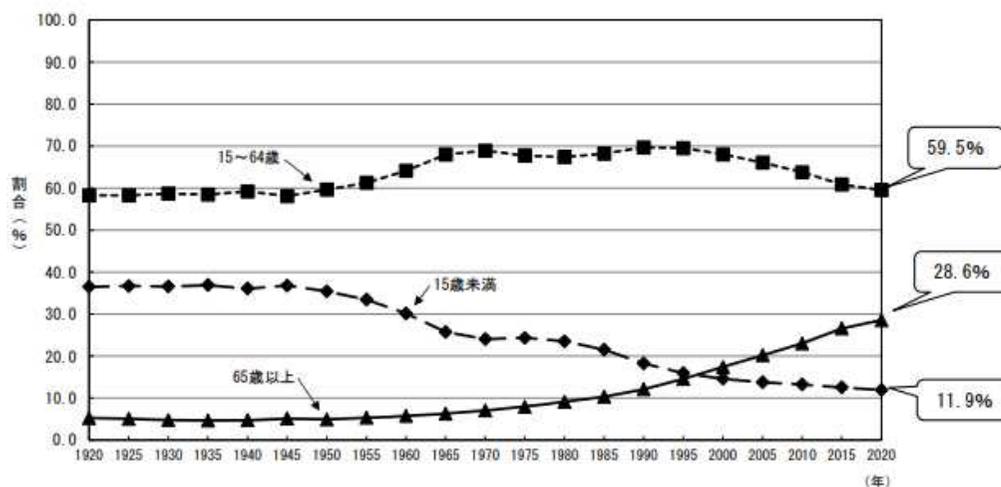
日本の人口の推移予測



出典:「国土の長期展望」中間とりまとめ 概要(平成23年2月21日国土審議会政策部会長期展望委員会)

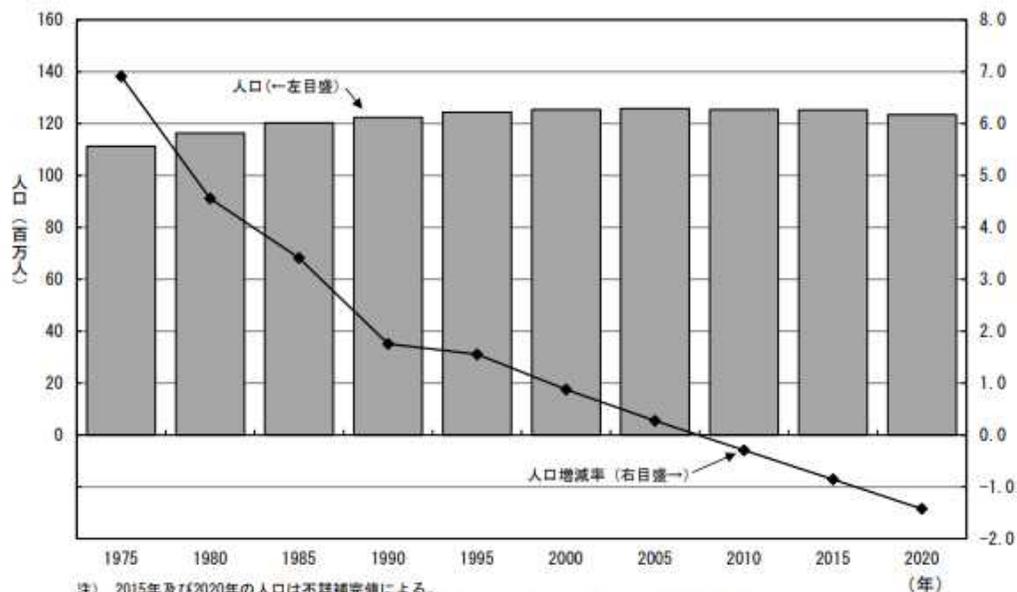


図Ⅱ－１－１ 年齢（３区分）別人口の割合の推移（1920年～2020年）



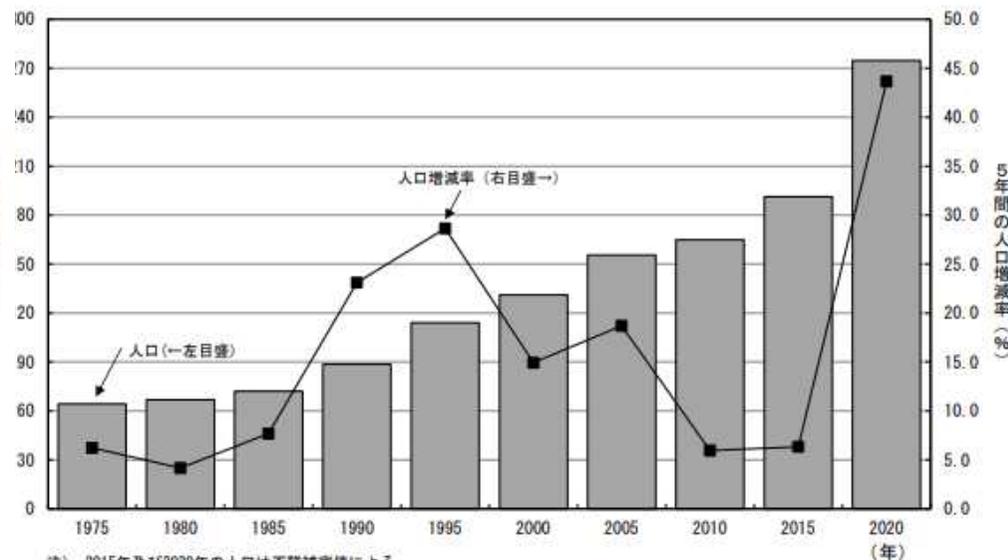
注) 2015年及び2020年は不詳補完値により算出。2010年以前は分母から不詳を除いて算出

図Ⅳ－１－１ 日本人人口及び日本人人口増減率の推移（1975年～2020年）



注) 2015年及び2020年の人口は不詳補完値による。
なお、2020年の人口増減率は不詳補完値により、2015年以前の人口増減率は原数値により算出

図Ⅳ－１－２ 外国人人口及び外国人人口増減率の推移（1975年～2020年）



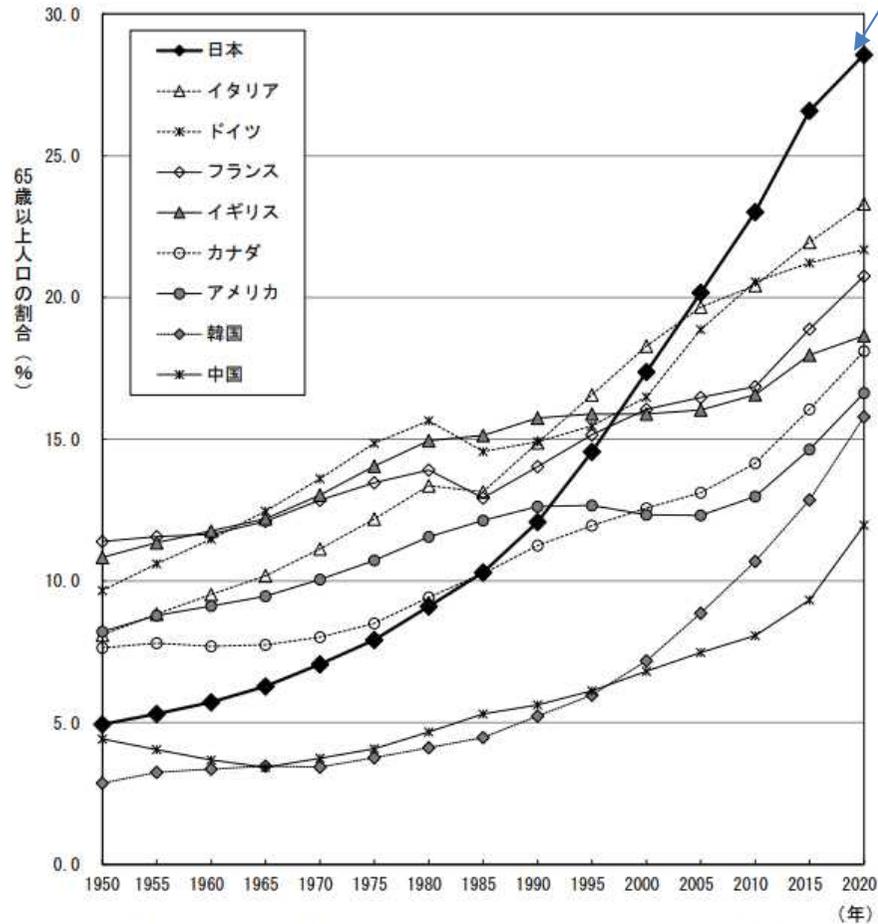
注) 2015年及び2020年の人口は不詳補完値による。
なお、2020年の人口増減率は不詳補完値により、2015年以前の人口増減率は原数値により算出

人口の構成推移 (海外と比べて)



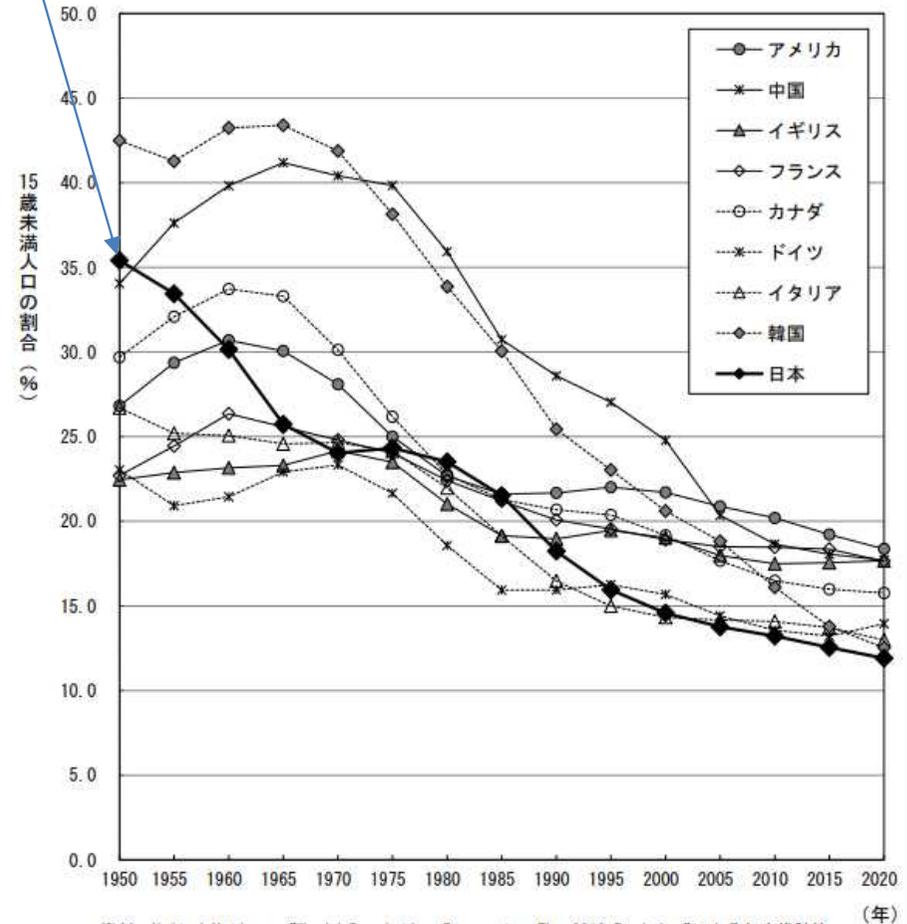
日本

図Ⅱ-1-3 65歳以上人口の割合の推移—諸外国との比較 (1950年~2020年)



資料: United Nations, "World Population Prospects, The 2019 Revision"による年央推計値。
 ただし、日本は国勢調査の結果による。
 注) 日本の2015年及び2020年は不詳補完値により算出。2010年以前は分母から不詳を除いて算出

図Ⅱ-1-2 15歳未満人口の割合の推移—諸外国との比較 (1950年~2020年)



資料: United Nations, "World Population Prospects, The 2019 Revision"による年央推計値。
 ただし、日本は国勢調査の結果による。
 注) 日本の2015年及び2020年は不詳補完値により算出。2010年以前は分母から不詳を除いて算出



1. 社会構造と子供たちを取り巻く環境の変化 (3) 認識すべき教室の中にある多様性・子供目線の重要性 (小学校のイメージ:一例)

10

発達障害や特異な才能、家で日本語を話す頻度が少ない子供、家庭の文化資本の差による学力差等、学級には様々な特性を持つ子供が存在し、これらの特性が複合しているケースもある。同学年による同年齢の集団は、同調圧力が働きやすく、学校に馴染めず苦しむ子供も一定数存在し、不登校・不登校傾向の子供は年々増加の一途をたどっている。さらには、一斉授業スタイルでは、一定の学力層に焦点を当てざるを得ず、結果として、いわゆる「浮きこぼれ」「落ちこぼれ」双方を救えていない現状。このように、子供たちが多様化する中で、教師一人による紙ベースの一斉授業スタイルは限界にきている。

発達障害の可能性のある子供 (学習面or行動面で著しい困難を示す)

発達障害^{※1}
2.7人
(7.7%)

- ・ADHD(注意欠如多動性障害)
いつもそわそわして、じっと座ってられない。いろいろなものに気が散り、授業に集中できない。
- ・LD(学習障害、読字障害)
文字が流暢に読めなかったり、板書に時間がかかったりして、授業の進度に合わせられない。
- ・ASD(自閉症スペクトラム)
学習活動の見通しが持てないと不安になる。暗黙のルールがわからず、突然発言してしまう。

特異な才能のある子供

Gifted^{※2}
0.8人
(2.3%)

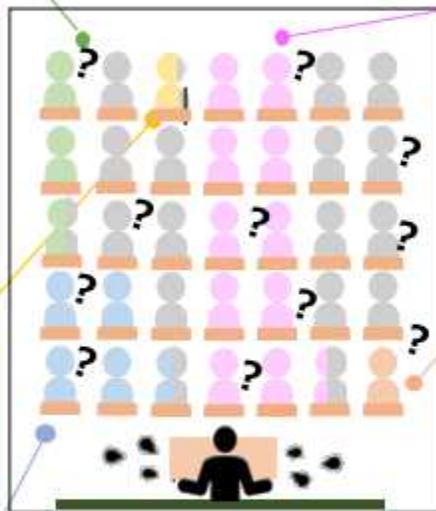
- 授業が眠て苦痛。価値観や感じ方の共感も得られなくて孤独。発言すると授業の雰囲気壊してしまう。
- 小3から中学数学、小5で数ⅡBをやっていた。4歳のころ進化論を理解して、8歳で量子力学や相対性理論を理解していた。

不登校・不登校傾向の子供

不登校^{※3}
0.4人
(1.0%)

不登校傾向^{※4}
4.1人
(11.8%)

※このほかにも、学校には、病気療養で学校に通えない子供やいわゆるヤングケアラー等、多様な背景や困難を抱える子供が存在している



小学校 35人学級

家にある本が少ない子供^{※5}
10.4人
(29.8%)

家庭の文化資本の違い

家にある本の冊数が少なく
学力の低い傾向が見られる子供
※家にある本の冊数と正答率の間には相関
家に本が10冊又は25冊と答えた割合



家で日本語をあまり話さない子供^{※6}
1.0人
(2.9%)

家で日本語を話す頻度の違い

家で日本語を「いつも話している」子供と「全く話さない」子供の間には、正答率に差が見られる
※家で日本語を「全く話さない」「ときどき話す」と答えた割合

子供たちの特性や関心・意欲は様々

- 話すこと・聞くこと
書くこと・読むこと
が得意な子供
- 文字情報・
音映像などの情報の
扱いが得意な子供
- 音やダンスで表現
することが
得意な子供
- 特定の分野に極めて
高い集中力を
示す子供
- 興味や関心が
拡散しやすい子供
- 特定の分野などに
関心・意欲や知的好
奇心が旺盛な子供

【出典】※1 通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果 平成24年12月 (文部科学省) 「2.7人(7.7%)」の数字は、ADHD、LD、ASDの内訳を示したものではない。
 発達障害の記載は、日野公三著『発達障害の子どもの進路と多様な可能性』(WAVE出版、2018年)を参考に内閣府で作成。
 ※2 日本には定義がないため、IQ130以上を仮定し、知能指数のベルカーブの正規分布を元に算出。子供の吹き出しは、文部科学省 特定分野に特異な才能のある児童生徒に対する学校における指導・支援の在り方等に関する有識者会議アンケートを参考に編集。
 ※3 不登校 年間に通続又は断続して30日以上欠席 (令和2年度 児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査(文部科学省))
 ※4 不登校傾向 年間欠席数30日未満、部分登校、保健室登校、「基本的には教室で過ごし、習と同じことをしているが、心の中では学校に通いたくない・学校が辛い・嫌だと感じている」場合など含む(不登校傾向にある子どもの実態調査(日本財団))
 ※5 令和3年度 全国学力・学習状況調査 児童質問紙、生徒質問紙結果より内閣府において作成。全国平均値等を1クラスに仮見立てた場合のイメージ図。実際には偏在等は生じている可能性のある留意。
 児童生徒質問内容: あなたの家には、およそどれくらいの本がありますか。(家にある本の冊数は、家庭の社会的経済的背景を表す代替指標の一つ)
 児童生徒質問内容: あなたは、家でどれくらい日本語を話しますか。(家で日本語を話す頻度の状況を確認するための質問事項)



- ① 児童生徒の学習改善につながるものにしていくこと
- ② 教師の指導改善につながるものにしていくこと
- ③ これまで慣行として行われてきたことでも、
必要性・妥当性が認められないものは見直していくこと



目指すべきは、資質・能力の育成

学習評価の基本的な考え方

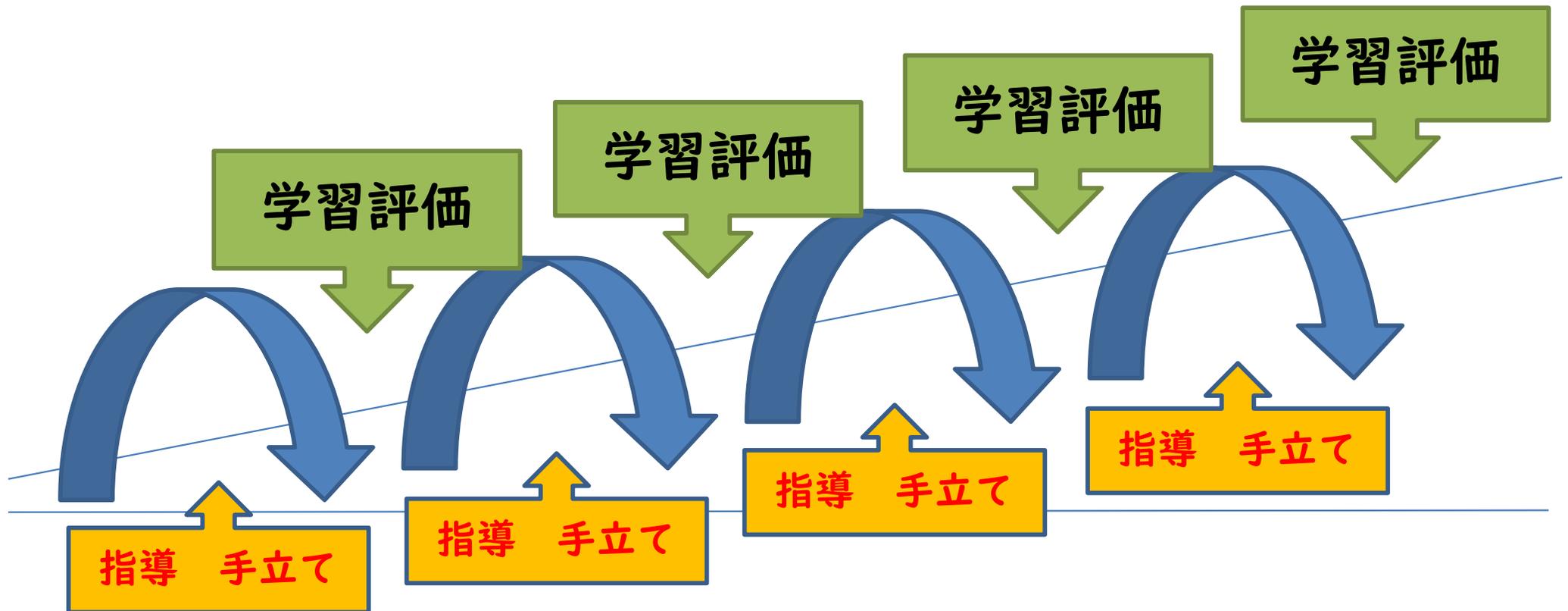


平成29・30年改訂の学習指導要領下における
学習評価に関するQ&A より

単元の指導と学習評価について



記録に残すものについては、
単元の評価規準に基づき、
その実現状況をみていく。





○ PISA2012（平成24年実施）においては、読解力の平均得点が比較可能な調査回以降、最も高くなっているなどの成果が見られたが、PISA2015（平成27年実施）においては、読解力について、国際的には引き続き平均得点が高い上位グループに位置しているものの、前回調査と比較して平均得点が有意に低下していると分析がなされている。これは、調査の方式がコンピュータを用いたテスト（CBT）に全面移行する中で、子供たちが、紙ではないコンピュータ上の複数の画面から情報を取り出し、考察しながら解答することに慣れておらず、戸惑いがあったものと考えられるが、そうした影響に加えて、情報化の進展に伴い、特に子供にとって言葉を取り巻く環境が変化する中で、読解力に関して改善すべき課題が明らかとなったものと考えられる。

○ 全国学力・学習状況調査等の結果によると、小学校では、文における主語を捉えることや文の構成を理解したり表現の工夫を捉えたりすること、目的に応じて文章を要約したり複数の情報を関連付けて理解を深めたりすることなどに課題があることが明らかになっている。中学校では、伝えたい内容や自分の考えについて根拠を明確にして書いたり話したりすることや、複数の資料から適切な情報を得てそれらを比較したり関連付けたりすること、文章を読んで根拠の明確さや論理の展開、表現の仕方等について評価することなどに課題があることが明らかになっている。

○ 一方、全国学力・学習状況調査において、各教科等の指導のねらいを明確にした上で言語活動を適切に位置付けた学校の割合は、小学校、中学校ともに90%程度となっており、言語活動の充実を踏まえた授業改善が図られている。しかし、依然として教材への依存度が高いとの指摘もあり、更なる授業改善が求められる。

OECD 生徒の学習到達度調査2018年調査(PISA2018)のポイント

結果概要

<PISA2018について>

OECD(経済協力開発機構)の生徒の学習到達度調査(PISA)は、義務教育修了段階の15歳児を対象に、2000年から3年ごとに、読解力、数学的リテラシー、科学的リテラシーの3分野で実施(2018年調査は読解力が中心分野)。平均得点は経年比較可能な設計。前回2015年調査からコンピュータ使用型調査に移行。日本は、高校1年相当学年が対象で、2018年調査は、同年6~8月に実施。

<日本の結果>

三分野

- ◆ 数学的リテラシー及び科学的リテラシーは、引き続き世界トップレベル。調査開始以降の長期トレンドとしても、安定的に世界トップレベルを維持しているとOECDが分析。
- ◆ 読解力は、OECD平均より高得点のグループに位置するが、前回より平均得点・順位が統計的に有意に低下。長期トレンドとしては、統計的に有意な変化が見られない「平坦」タイプとOECDが分析。

読解力

- ◆ 読解力の問題で、日本の生徒の正答率が比較的低かった問題には、テキストから情報を探し出す問題や、テキストの質と信ぴょう性を評価する問題などがあつた。
- ◆ 読解力の自由記述形式の問題において、自分の考えを他者に伝えるように根拠を示して説明することに、引き続き、課題がある。
- ◆ 生徒質問調査から、日本の生徒は「読書は、大好きな趣味の一つだ」と答える生徒の割合がOECD平均より高いなど、読書を肯定的にとらえる傾向がある。また、こうした生徒ほど読解力の得点が高い傾向にある。

質問調査

- ◆ 社会経済文化的背景の水準が低い生徒群ほど、習熟度レベルの低い生徒の割合が多い傾向は、他のOECD加盟国と同様に見られた。
- ◆ 生徒のICTの活用状況については、日本は、学校の授業での利用時間が短い。また、学校外では多様な用途で利用しているものの、チャットやゲームに偏っている傾向がある。

読解力の定義

【読解力の定義】

自らの目標を達成し、自らの知識と可能性を発達させ、社会に参加するために、テキストを理解し、利用し、評価し、熟考し、これに取り組むこと。

※下線部は2018年調査からの定義変更箇所

- コンピュータ使用型に移行し、デジタルテキストを踏まえた設計となったため、「書かれたテキスト」から「テキスト」に変更。(デジタルテキスト:オンライン上の多様な形式を用いたテキスト(Webサイト、投稿文、電子メールなど))
- 議論の信ぴょう性や著者の視点を検討する能力を把握するため、テキストを「評価する」という用語を追加。

測定する能力

①情報を探し出す

- テキスト中の情報にアクセスし、取り出す
- 関連するテキストを探索し、選び出す

②理解する

- 字句の意味を理解する
- 統合し、推論を創出する

③評価し、熟考する

- 質と信ぴょう性を評価する
- 内容と形式について熟考する
- 矛盾を見つけて対処する

(下線部は、2018年調査から新たに定義に追加された要素)

読解力の調査結果の分析

- 読解力の平均得点の低下に影響を与える要因について分析したところ、生徒側(関心・意欲、自由記述の解答状況、課題文の内容に関する既存知識・経験、コンピュータ画面上での長文読解の慣れ等)、問題側(構成、テーマ、テキストの種類、翻訳の影響等)に関する事項などの様々な要因が複合的に影響している可能性があると考えられる。
- 読解力を測定する3つの能力について、それらの平均得点が比較可能な2000年、2009年及び2018年(読解力が中心分野の回)の調査結果を踏まえると、
 - ・「②理解する」能力については、その平均得点が安定的に高い。
 - ・「①情報を探し出す」能力については、2009年調査結果と比較すると、その平均得点が低下。特に、習熟度レベル5以上の高得点層の割合がOECD平均と同程度まで少なくなっている。
 - ・「③評価し、熟考する」能力については、2009年調査結果と比較すると、平均得点が低下。特に、2018年調査から、「質と信ぴょう性を評価する」「矛盾を見つけて対処する」が定義に追加され、これらを問う問題の正答率が低かった。
- また、各問題の解答状況を分析したところ、自由記述形式の問題において、自分の考えを根拠を示して説明することに、引き続き課題がある。誤答には、自分の考えを他者に伝えるように記述できず、問題文からの語句の引用のみで説明が不十分な解答となるなどの傾向が見られる。

日本の生徒の正答率が低い問題の一例

◆【①情報を探し出す】や【③評価し、熟考する】に関する問題 【2018年調査新規問題】

ある商品について、販売元の企業とオンライン雑誌という異なる立場から発信された複数の課題文から必要な情報を探し出したり、それぞれの意図を考えながら、主張や情報の質と信ぴょう性を評価した上で、自分がどう対処するかを説明したりする問題。

大問

◆課題文1:企業のWebサイト (商品の安全性を宣伝)

問1:字句や内容を理解する
問2:記載内容の質と信ぴょう性を評価する(自由記述)

◆課題文2:オンライン雑誌記事 (商品の安全性について別の見解)

問3:課題文の内容形式を考える
問4:必要な情報がどのWebサイトに記載されているか推測し探し出す
【測定する能力①情報を探し出す】

◆課題文1と2を比較対照

問5:両文章の異同を確認する

問6:情報の質と信ぴょう性を評価し自分ならどう対処するか、根拠を示して説明する(自由記述)

【測定する能力③評価し、熟考する】

※問4や問6のような問題において、日本の生徒の正答率がOECD平均と比べて低い 4



読解力の定義

【読解力の定義】

自らの目標を達成し、自らの知識と可能性を発達させ、社会に参加するために、テキストを理解し、利用し、評価し、熟考し、これに取り組むこと。

測定する能力

①情報を探し出す

- テキスト中の情報にアクセスし、取り出す
- 関連するテキストを探索し、選び出す

②理解する

- 字句の意味を理解する
- 統合し、推論を創出する

③評価し、熟考する

- 質と信ぴょう性を評価する
- 内容と形式について熟考する
- 矛盾を見つけて対処する

読解力分野のコンピュータ使用型調査の特徴

2018年調査は、全小問245題のうち約7割の173題がコンピュータ使用型調査用に開発された新規問題。オンライン上の多様な形式を用いた課題文(投稿文、電子メール、フォーラムへの参加回答など)を活用。

●2018年調査(読解力分野)の公開問題【ラパヌイ島】

問1

3種類の課題文で構成
 ○大学教授のブログ
 ○書評
 ○オンライン科学雑誌の記事

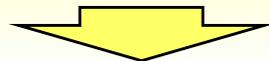
問1【測定する能力 ①情報を探し出す】
 ある大学教授のブログを画面をスクロールして読んだ上で、教授がフィールドワークを始めた時期を選択して解答する。

問6

問6【測定する能力 ②理解する】
 2つの説に関する原因と結果を選択肢から選び、ドラッグ&ドロップ操作によりそれぞれ正しい位置に移動させ、表を完成させる。

タブをクリックし、画面表示する課題文を選ぶ。

- ◆ テキストから情報を探し出す問題や、テキストの質と信ぴょう性を評価する問題などの正答率が比較的低い。
- ◆ 自由記述形式の問題において、自分の考えを他者に伝わるように根拠を示して説明することに引き続き課題。



新学習指導要領の実施による、①各教科等における言語能力の確実な育成、②情報活用能力の確実な育成、が必要



OECD生徒の学習到達度調査

PISA2022のポイント

前回調査で課題が見られた問題の今回調査での状況

- 前回2018年調査では、ある商品について、販売元の企業とオンライン雑誌という異なる立場から発信された複数の課題文から必要な情報を探し出したり、それぞれの意図を考えながら、主張や情報の質と信ぴょう性を評価した上で、自分がどう対処するかを説明したりする大問において、特に問4・問6の正答率がOECD平均より低い状況が見られた。
- 今回調査では、この大問の正答率が全体的に微増する傾向が見られた。※今回は正答率のOECD平均は公表されていない。

◆課題文1：企業のWebサイト (商品の安全性を宣伝)

問1：字句や内容を理解する

69.9%→75.2%【②理解する】

問2：記載内容の質と信ぴょう性を評価する（自由記述）

60.2%→65.7%【③評価し、熟考する】

◆課題文2：オンライン雑誌記事 (商品の安全性について別の見解)

問3：課題文の内容形式を考える

81.5%→83.1%【③評価し、熟考する】

問4：必要な情報がどのWebサイトに記載されているか推測し探し出す

56.1%→56.8%【①情報を探し出す】

◆課題文1と2を比較対照

問5：両文章の異同を確認する

53.1%→59.9%【③評価し、熟考する】

問6：情報の質と信ぴょう性を評価し自分ならどう対処するか、根拠を示して説明する（自由記述）

8.9%→14.3%【③評価し、熟考する】

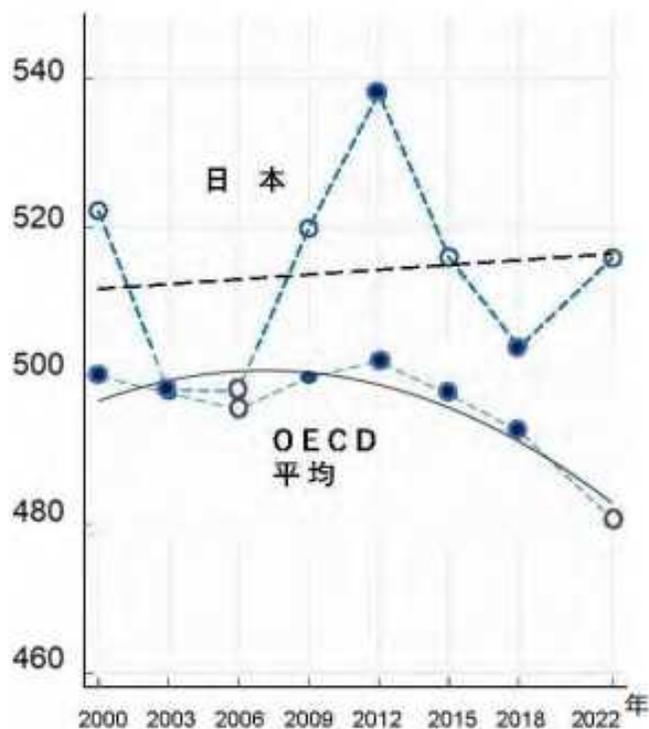
※青字は日本の正答率（左：2018年調査、右：2022年調査）



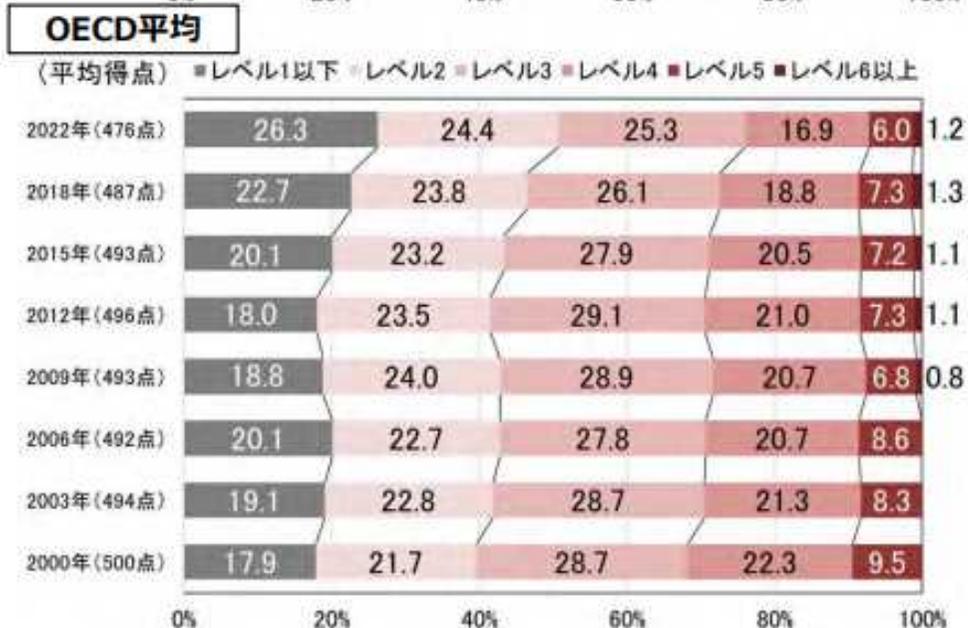
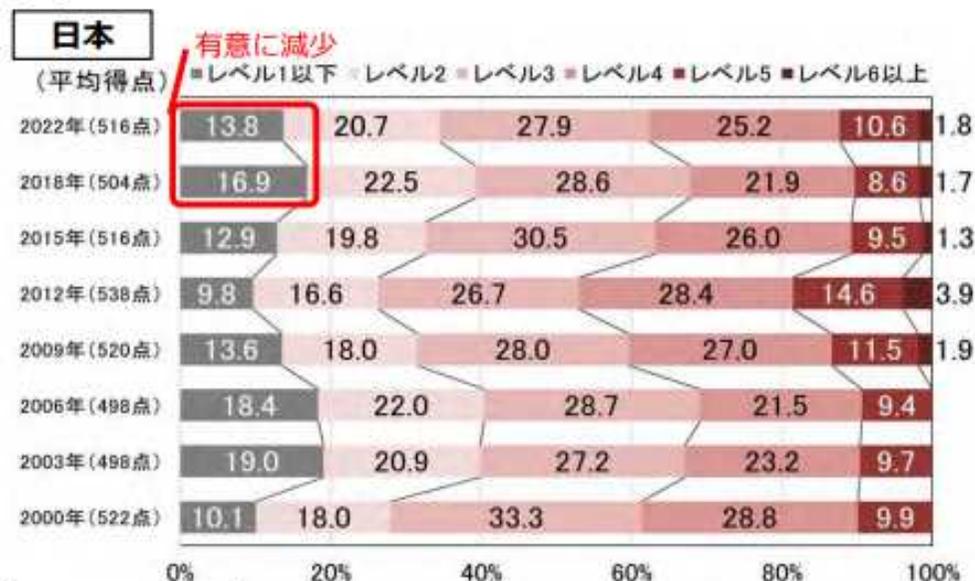
- 読解力の平均得点(516点)は、OECD加盟国中2位(順位の範囲:1-6位)。前回2018年調査(504点)から有意に上昇し、前々回2015年調査(516点)と同水準。
- OECD平均は平均得点の長期トレンドが下降しているが、日本は平坦型(平均得点のトレンドに統計的に有意な変化がない)。
- 日本は習熟度レベル1以下の低得点層の割合が前回調査に比べて有意に減少している。

(i) 読解力の平均得点の推移

(注) 白丸はPISA2022年の平均得点を統計的に有意に上回ったり下回ったりしない平均得点を示す。



(ii) 習熟度レベル別の生徒の割合 (経年変化) (読解力)





Step 1 単元で取り上げる指導事項の確認

Step 2 単元の目標と言語活動の設定

Step 3 単元の評価規準の設定

Step 4 単元の指導と評価の計画の決定

Step 5 評価の実際と手立ての想定



こちらに
詳しく解説
されております



- 事例1 キーワード 指導と評価の計画から評価の総括まで
「夏休みの思い出を報告しよう」(第2学年)
- 事例2 キーワード 「主体的に学習に取り組む態度」の評価
「世代による言葉の違いについて意見文を書こう」(第6学年)
- 事例3 キーワード 「知識・技能」の評価
「読書に関する情報を読んで活用しよう」(第5学年)
- 事例4 キーワード 「思考・判断・表現」の評価
「読んで感じたことや考えたことをまとめよう(ごんぎつね)」(第4学年)

事例2 (主として「主体的に学習に取り組む態度」の評価方法の一例)①



単元で取り上げる指導事項を確認し、単元の目標と言語活動、評価規準を設定

【単元で取り上げる指導事項】

- ・語句の由来などに関心をもつとともに、時間の経過による言葉の変化や世代による言葉の違いに気付き、共通語と方言との違いを理解すること。また、仮名及び漢字の由来、特質などについて理解すること。〔知識及び技能〕(3)ウ
- ・筋道の通った文章となるように、文章全体の構成や展開を考えること。〔思考力、判断力、表現力等〕B(1)イ
- ・目的や意図に応じて簡単に書いたり詳しく書いたりするとともに、事実と感想、意見とを区別して書いたりするなど、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫すること。〔思考力、判断力、表現力等〕B(1)ウ
- ・言葉がもつよさを認識するとともに、進んで読書をし、国語の大切さを自覚して、思いや考えを伝え合おうとする態度を養う。
〔学びに向かう力、人間性等〕

1 単元の目標

- (1) 世代による言葉の違いに気付くことができる。〔知識及び技能〕(3)ウ
- (2) 筋道の通った文章となるように、文章全体の構成や展開を考えることができる。〔思考力、判断力、表現力等〕B(1)イ
- (3) 事実と感想、意見とを区別して書くなど、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫することができる。〔思考力、判断力、表現力等〕B(1)ウ
- (4) 言葉がもつよさを認識するとともに、進んで読書をし、国語の大切さを自覚して思いや考えを伝え合おうとする。
〔学びに向かう力、人間性等〕

2 単元で取り上げる言語活動

世代による言葉の違いについて、書き表し方を工夫して意見文を書く。(関連：〔思考力、判断力、表現力等〕B(2)ア)

3 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
① 世代による言葉の違いに気付いている。(3)ウ	① 「書くこと」において、筋道の通った文章となるように、文章全体の構成や展開を考えている。(B(1)イ) ② 「書くこと」において、事実と感想、意見とを区別して書くなど、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫している。(B(1)ウ)	① 粘り強く、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫し、学習の見通しをもって意見文を書こうとしている。



「おおむね満足できる」状況(B)の想定
 「使用している言葉が世代によって一部異なっていることを示す情報を発見し、そこから分かったことをノートに記述している様子が見られた児童」と想定

時	学習活動	指導上の留意点	評価規準・評価方法等
1	[略]		
2・3・4・5	<p>○上の世代との会話において感じる戸惑いや難しさの原因が何であるかを予想する。</p> <p>○戸惑いや難しさの原因を理解する手がかりとなる情報を資料から収集し、「調べたこと(事実)」としてノートに整理する。</p> <p>また、整理した情報から「わかったこと」もノートに書く。</p> <p>○ノートにまとめたことを友達と説明し合い、相互に質問したり気付いたりしたことを伝えたりして、自分の考えを整理する。</p> <p>○考えたことを読み手に伝えるために、文章全体の構成をどのようにするかを考え、文章構成表に整理する。</p> <p>○文章構成表を示しながら文章の大まかな流れを友達に説明し、筋道の通った文章になるかどうかを話し合う。</p>	<p>・資料として「国語に関する世論調査」(文化庁)を紹介し、活用を勧める。</p> <p>・収集した情報は、出典を記録しておくように指導する。</p> <p>・収集した情報を使って戸惑いや難しさの原因を説明できるか、情報と「分かったこと」が対応しているか、「分かったこと」が明確かという点を友達と確認するように指導する。必要があれば修正を求める。</p> <p>・「始め」、「中」、「終わり」の各部分に書く内容の大体と配置を考えるように促す。</p> <p>・読み手の関心を引くために、「始め」において問いかけたり、自分の経験を示したりする工夫を盛り込むようにする。</p> <p>・頭括型、尾括型、双括型の文章モデルを示す。</p> <p>・必要に応じて文章構成の修正を指導する。</p>	<p>[知識・技能①] <u>ノート</u> ・世代によって使用する言葉の違いがあることに気付いているかの確認</p> <p>[思考・判断・表現①] 文章構成表 ・筋道の通った文章構成になっているかの確認</p>
6・7・8・9	[略]	[略]	[略]

主体的に取り組みたくなる課題

[知識・技能①]
ノート
 ・世代によって使用する言葉の違いがあることに気付いているかの確認

[思考・判断・表現①]
文章構成表
 ・筋道の通った文章構成になっているかの確認

「おおむね満足できる」状況(B)の想定
 「資料から収集した情報と、その情報から分かったことが対応しており、全体として筋道の通った構成を考えている児童」と想定

**適切な時間に
 評価の場面を設定**

事例2③



単元の指導と評価の計画の決定

時	学習活動	指導上の留意点	評価規準・評価方法等
1	[略]	[略]	
試行錯誤する場面の確保			
6 ・ 7 ・ 8 ・ 9	<p>○ノートに整理したことと文章構成表に基づいて下書きをする。</p> <p>○友達と下書きを読み合う。</p> <p>○下書きを修正し、それを基に清書する。</p> <p>○清書した意見文を友達と読み合う。</p> <p>○学習全体を振り返る。</p>	<p>・下書きを書く際は、客観的な事象による裏付けと合わせて自分が考えたことを示すという点に留意して、書き表し方を工夫できるよう助言する。</p> <p>・書き表し方について友達と助言し合うよう促す。</p> <p>・完成後は友達の考えや書き表し方のよさを伝え合い、自分の文章のよいところに気付けるようにする。</p> <p>・自分の考えたことを伝えるために、どのように書き表し方を工夫したのかを振り返らせる。</p>	<p>[思考・判断・表現②] 意見文 ・考えを伝えるために書き表し方を工夫しているかの確認</p> <p>[主体的に学習に取り組む態度①] 振り返りの記述 ・粘り強く試行錯誤しながら書き表し方を工夫しているかの確認</p>

「おおむね満足できる」状況(B)の想定

「自身の書き表し方の工夫について振り返っているとともに、友達や教師と交流した際に得た指摘や助言を踏まえて書き表し方をさらに良いものにしようと粘り強く試行錯誤する様子が見られた児童」と想定

適切な時間に
評価の場面を設定



【知識・技能①】 世代による言葉の違いに気付いている。(第2・3・4・5時)

「おおむね満足できる状況」(B)と評価した例)

使用している言葉が世代によって一部異なっていることを示す情報を発見してノートに整理している。

収集してノートの整理した情報から分かったことをノートに記述している。

言葉の使い方について調べた結果

調べたこと①(事実)

「漢字を用いた言い方と同じような意味で使われるカタカナを用いた言い方のどちらの言葉を主に使うか」
文化庁「国語に関する世論調査」の結果(平成27年度)

	16～19才	70才以上
アーティスト	61.9%	11.6%
芸術家	17.9%	75.6%
スタジアム	41.7%	28.3%
競技場	33.3%	55.7%
リベンジ	91.7%	27.6%
雪辱	3.6%	52.3%
アスリート	69.0%	17.1%
運動選手	11.9%	69.6%

分かったこと①

- ・16～19才はカタカナを用いた言い方をよく使う。
- ・70才以上は漢字を用いた言い方をよく使う。

調べたこと②(事実)

「「～る」、「～い」を使うことがあるか」
文化庁「国語に関する世論調査」の結果
(平成25・26年度)

「使うことがある」と回答した割合

	16～19才	70才以上
パニクる	70.7%	17.2%
お茶する	53.7%	37.9%
うざい	78.0%	1.1%
やばい	91.5%	5.1%

分かったこと②

- ・「～る」や「～い」という言葉を使う割合は、16～19才と70才以上で大きなちがいがあある。

図1：児童1のノート

漢字を用いた言い方と片仮名を用いた言い方、及び「～る」、「～い」という言い方について世代ごとの傾向に関する情報を資料から収集し、ノートに整理している。そして、高齢者が漢字を用いた表現をよく使う傾向にあることや「パニクる」、「うざい」などの言葉を使う割合が若い世代と高齢者で異なるということを記述している。このような記述から、「おおむね満足できる」状況(B)と評価



【思考・判断・表現①】「書くこと」において、筋道の通った文章となるように、文章全体の構成や展開を考えている（第2・3・4・5時）

（「おおむね満足できる状況」(B)と評価した例）

全体として筋道の通った構成を考えている。

自身の経験と読み手への問いかけを「始め」において提示し、「中」では資料から得た2種類の情報とそこから分かったことを順に並べ、まとめとして自らの考えを「終わり」に述べるような構成を選択しているため、「始め」、「中」、「終わり」の各部分とその含まれる要素がつながりをもって適切に配置されていると判断し、「おおむね満足できる」状況(B)と評価

終わり	中	始め
<p>○ 世代によって言い方がちがったり、同じ言葉でも意味がちがったりすることがある。</p> <p>○ ふだん友達と話している言葉</p> <p>↓ちがう世代には通じないかもしれない。</p> <p>○ 相手に正しく伝わっているかどうかを確かめて使う。</p>	<p>②世代による言葉の意味のちがい（平成二十六年調査より）</p> <p>○ 「やばい」の意味（使い方）</p> <p>「とてもすばらしい」という意味で 「やばい」という言い方をするものが「ある」 十六から十九歳 九十一・五％ 「とてもすばらしい」という意味で 「やばい」という言い方をするものが「ない」 五十代以上 八十％以上</p> <p>↓「やばい」という同じ言葉でも、十六から十九歳の人と五十代以上の人とではちがう意味で使っている。</p>	<p>・ 自分の体験（祖父との会話） 祖父 「えもんかけ」という言葉 意味が分からなくて困った。 他にも「えりまき」（マフラー）「さじ」（スプーン）という言葉も出てくる。 ↓「ハンガー」と言えばすぐ分かるのに、どうして「えもんかけ」なんて言うのか。世代で言い方がちがうのか。</p> <p>文化庁「国語に関する世論調査」から</p> <p>①世代による言い方のちがい（平成二十七年調査より）</p> <p>○ どちらを主に使うか 「アーティスト」 十六から十九歳 六十一・九％ 「芸術家」 七十歳以上 七十五・六％ 「スタジアム」と「競技場」 「リベンジ」と「雪辱」 「アスリート」と「運動選手」</p> <p>↓十六から十九歳 カタカナを使うことが多い。 七十歳以上 漢字を使うことが多い。</p>

図2：児童2の文章構成表

資料から収集した情報とその情報から分かったことが対応している

資料から収集した情報とその情報から分かったことが対応している



【思考・判断・表現②】「書くこと」において、事実と感想、意見を区別して書くなど、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫している。（第6・7・8時）

（「おおむね満足できる状況」(B)と評価した例）

客観的な裏付けとなるように、「事実」の出典が明記されている。

【児童3が修正した下書き（「中」の部分）】
文正庁が行った「国語に関する世論調査」に、「漢字を用いた言い方と同じような意味が使用されるカタカナを用いた言い方のどちらを主に使うか」を世代別に調査した項目があります。そこには、例えば、「アーティスト」という言い方を主に使う人もいれば、「芸術家」という言い方をする人もいるという結果が示されています。わかい人の六十一・九％は「アーティスト」、七十才以上の人の七十五・六％は「芸術家」と言っているようです。七十才以上の世代は、この他にも、私たちが「リベンジ」、「アスリート」と言っている言葉を「雪辱（せつじょく）」、「運動選手」のような言い方をしていることが多いという結果になっています。こうしたことから、世代によって主に使う言い方はちがうということが分かります。

また、世代によって同じ言葉であっても意味のとらえ方が変わることもありません。平成二十六年に行われた世論調査では、「やばい」の使われ方が取りあげられています。それによると、十六才から十九才の九十一・五％が「やばい」を「とてもすばらしい」という意味で使っています。しかし、五十代以上は八十％以上が「とてもすばらしい」という意味では使っていないという結果になっています。世代によって、「やばい」という言葉の意味がちがうようです。

具体的な数値の記述

信頼できる資料から得られた情報が、割合などの数値を伴って示され、それに基づいて分かったことや考えたことが書かれている場合、「おおむね満足できる」状況(B)と評価

客観的な事実から述べられていることがわかる文末表現

事例2⑦



作成した「指導と評価の計画」を基に、授業を行う

【主体的に学習に取り組む態度①】粘り強く、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫し、学習の見通しをもって意見文を書こうとしている。(第6・7・8時)

児童3の場合 (「おおむね満足できる状況」(B)と評価した例)

＜第6時＞

④結論に対する意見の裏付けとして弱いと判断し教師から助言

1. 児童3の下書き

【児童3が下書きした「中」の一部】
文化庁が行った「国語に関する世論調査」に、「漢字を用いた言い方と同じような意味で使われるカタカナを用いた言い方のどちらを主に使うか」を世代別に調査したこう目があります。そこには、例えば、「アーティスト」という言い方を主に使う人もいれば、「芸術家」という言い方をする人もいるという結果が示されていて、「芸術家」という漢字を用いた言い方を主に使っている人は七十才以上の人に多いことが分かりました。この他、わたしたちが「ベンジ」「アスリート」と言っている言葉について七十才以上の人は「雪辱(せつじょく)」「運動選手」のように漢字を用いた言い方をすることが多いという結果になっています。世代によって主に使う言い方はちがうようです。

2. 児童同士の交流と振り返り

【友達の指摘】
「『芸術家』という言い方が分かりました。」の文が、事実と分かったことが混ざって、ちよつと分かりにくいよ。

3. 教師からの助言

文を切つて、事実と分かったことをはっきり分けたら、分かりやすくなりそうですね。
文章のまとめとして、「世代がちがう人と話す時は、他の言葉に言いかえて説明する必要もある」、「相手に正しく伝わっているかどうかを確かめて言葉を使うべき」といった意見を書くのであれば、ノートに整理してあった「やばい」の意味のとらえ方が世代によってちがうことも書き足してはどうですか。説得力が増すと思いますよ。

【第6時の振り返り】
同じ意味の言葉でも世代によって言い方がちがうということを伝えるために、「国語に関する世論調査」の情報を使いました。「芸術家」という言い方について書いたところが分かりにくいとAさんに言われました。確かに読みにくいので、次の時間に文を切つて、事実と分かったことをはっきり分けてみようと思います。

③Aさんの指摘を受けた児童3の試行錯誤を見取り

②Aさんの指摘を受けて次時に修正しようとしている

①書き表し方についてAさんから指摘をもらう

友達の指摘や教師の助言を踏まえて児童3が修正を試みる (第7時へ)

事例2⑧



<第7時>

①書き表し方についてBさんから指摘をもらう

②Bさんの指摘を受けて次時に修正

Bさん

【友達の指摘】
「若い人」って何とくらいなの
かはつきりさせると良いと思
うな。他にも、最初に示した世
論調査は何年に行われたのか
が分からないよ。

【第7時の振り返り】
事実と分かったことをはつきり分
けて書いてみました。先生からもアドバイ
スを受けたので、「やばい」の例も加え
てみました。ずいぶんくわしくなった気
がしますが、
でも、Bさんから、年れいなどはつ
きりさせてはどうかと言われました。な
るほどと思いました。ノートを確にし
て、次の時間に修正しようと思います。

【児童3が修正した下書き（「中」の部分）】
文化庁が行った国語に関する世論調査に、「漢字を用いた言い方と同じよう
な意味で使われるカタカナを用いた言い方のどちらを主に使うか」を世代別に調
査した項目があります。そこには、例えば、「アーティスト」という言い方を主に使う
人もいれば、「芸術家」という言い方をする人もいるという結果が示されています。
わかかい人の六十一・九％は「アーティスト」、七十才以上の人の七十五・六％は「芸術
家」と言っているようです。七十才以上の世代は、この他にも、私たちが「リベンジ」、
「アスリート」と言っている言葉を「雪辱（せつじよく）」、「運動選手」のような言い
方をしていることが多いという結果になっています。こうしたことから、世代によっ
て主に使う言い方はちがうということが分かります。
また、世代によって同じ言葉であっても意味のとらえ方が変わることもありま
す。平成二十六年に行われた世論調査では、「やばい」の使われ方が取りあげら
れています。それによると、十六才から十九才の九十一・五％が「やばい」を「とても
すばらしい」という意味で使っています。しかし、五十代以上は八十％以上が「とて
もすばらしい」という意味では使っていないという結果になっています。世代によっ
て、「やばい」という言葉の意味がちがうようです。

書き表し方の工夫について振り返っていると、友達や教師と交流した際に得た指摘や助言を踏まえて書き表し方をさらに良いものにしようと粘り強く試行錯誤する様子が見られたと判断し「おおむね満足できる」状況 (B)



第6時に受けた教師からのアドバイスを取り入れている

主体的・対話的で深い学び



「主体的・対話的で深い学び」の視点に立った授業改善を行うことで、学校教育における質の高い学びを実現し、学習内容を深く理解し、資質・能力を身に付け、生涯にわたって能動的(アクティブ)に学び続けるようにする。

【主体的な学び】の視点

学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しを持って粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる「**主体的な学び**」が実現できているか。



主体的な学び
対話的な学び
深い学び

学びを人生や社会に
生かそうとする
学びに向かう力・
人間性等の涵養

生きて働く
知識・技能の
習得

未知の状況にも
対応できる
思考力・判断力・表現力
等の育成



【対話的な学び】の視点

子供同士の協働、教職員や地域の人との対話、先哲の考え方を手掛かりに考えること等を通じ、自己の考えを広げ深める「**対話的な学び**」が実現できているか。



【深い学び】の視点

習得・活用・探究という学びの過程の中で、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう「**深い学び**」が実現できているか。

資質・能力の育成のための授業改善の視点



3. 2020年代を通じて実現すべき「令和の日本型学校教育」の姿

① 個別最適な学び（「個に応じた指導」（指導の個別化と学習の個性化）を学習者の視点から整理した概念）

- ◆ 新学習指導要領では、「個に応じた指導」を一層重視し、指導方法や指導体制の工夫改善により、「個に応じた指導」の充実を図るとともに、コンピュータや情報通信ネットワークなどの情報手段を活用するために必要な環境を整えることが示されており、これらを適切に活用した学習活動の充実を図ることが必要
- ◆ GIGAスクール構想の実現による新たなICT環境の活用、少人数によるきめ細かな指導体制の整備を進め、「個に応じた指導」を充実していくことが重要
- ◆ その際、「主体的・対話的で深い学び」を実現し、学びの動機付けや幅広い資質・能力の育成に向けた効果的な取組を展開し、個々の家庭の経済事情等に左右されることなく、子供たちに必要な力を育む

指導の個別化

- 基礎的・基本的な知識・技能等を確実に習得させ、思考力・判断力・表現力等や、自ら学習を調整しながら粘り強く学習に取り組む態度等を育成するため、
・支援が必要な子供により重点的な指導を行うことなど効果的な指導を実現
・特性や学習進度等に応じ、指導方法・教材等の柔軟な提供・設定を行う

学習の個性化

- 基礎的・基本的な知識・技能等や情報活用能力等の学習の基盤となる資質・能力等を土台として、子供の興味・関心等に応じ、一人一人に応じた学習活動や学習課題に取り組む機会を提供することで、子供自身が学習が最適となるよう調整する

- ◆ 「個別最適な学び」が進められるよう、これまで以上に子供の成長やつまずき、悩みなどの理解に努め、個々の興味・関心・意欲等を踏まえてきめ細かく指導・支援することや、子供が自らの学習の状況を把握し、主体的に学習を調整することができるよう促していくことが求められる
- ◆ その際、ICTの活用により、学習履歴（スタディ・ログ）や生徒指導上のデータ、健康診断情報等を利活用することや、教師の負担を軽減することが重要

それぞれの学びを一体的に充実し
「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善につなげる

② 協働的な学び

- ◆ 「個別最適な学び」が「孤立した学び」に陥らないよう、探究的な学習や体験活動等を通じ、子供同士で、あるいは多様な他者と協働しながら、他者を価値ある存在として尊重し、様々な社会的な変化を乗り越え、持続可能な社会の創り手となることができるよう、必要な資質・能力を育成する「協働的な学び」を充実することも重要
- ◆ 集団の中で個が埋没してしまうことのないよう、一人一人のよい点や可能性を生かすことで、異なる考え方が組み合わせられ、よりよい学びを生み出す
- 知・徳・体を一体的に育むためには、教師と子供、子供同士の関わり合い、自分の感覚や行為を通して理解する実習・実験、地域社会での体験活動など、様々な場面でリアルな体験を通じて学ぶことの重要性が、AI技術が高度に発達するSociety5.0時代にこそ一層高まる
- 同一学年・学級はもとより、異学年間の学びや、ICTの活用による空間的・時間的制約を超えた他の学校の子供等との学び合いも大切



G I G Aスクール構想

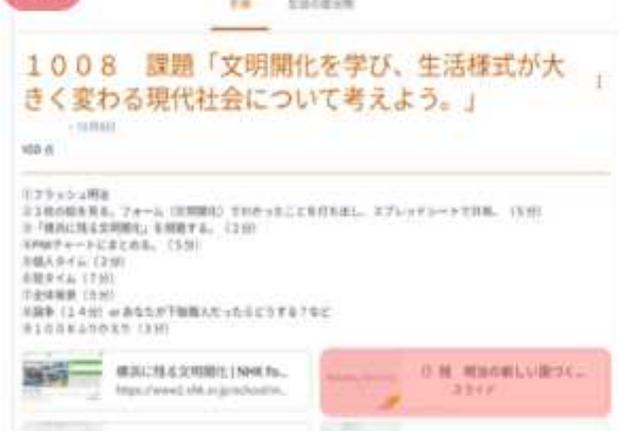
- ✓ 1人1台端末と、高速大容量の通信ネットワークを一体的に整備することで、特別な支援を必要とする子供を含め、多様な子供たちを誰一人取り残すことなく、公正に個別最適化され、資質・能力が一層確実に育成できる教育ICT環境を実現する
- ✓ これまでの我が国の教育実践と最先端のICTのベストミックスを図ることにより、教師・児童生徒の力を最大限に引き出す



個別最適な学びと協働的な学びを一体的に充実させ、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善へ



3-①



授業の導入でひな形学習カード配信

3-②



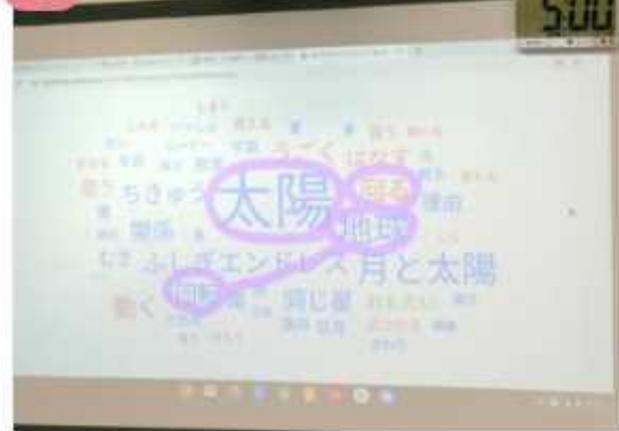
付箋操作のオンライン化

3-③



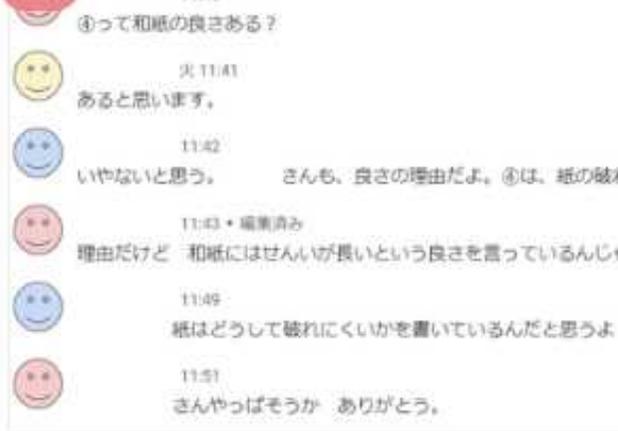
アウトプットを共有して互いのよさを発見

3-④



振り返り活動のDX

3-⑤



チャット機能で情報共有

3-⑥



共同編集で学習のまとめを作成

日常的に、必要な時に使えるように。



3-7 コメント機能を活用した学び合いの活性化



3-8 いろいろな意見を出し合って互いの考えを深めたり広めたりしよう



3-9 カレンダーで予定の共有



3-10 オンラインで学校の外とつながろう



3-11 作成スライドを分担した後で協働的に解決

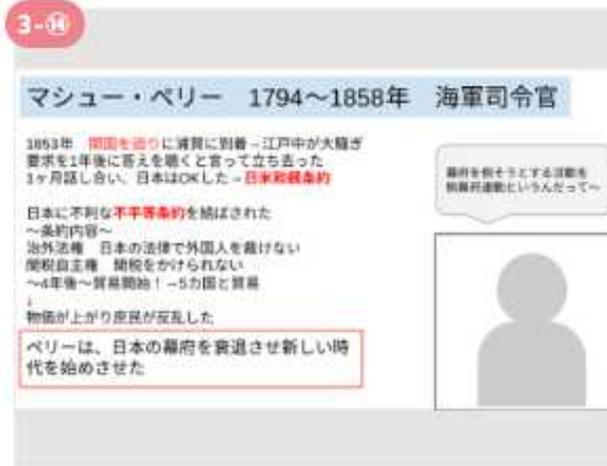


3-12 児童会・生徒会活動の共同作業に活用しよう

思考ツールであり、表現ツールでもある。



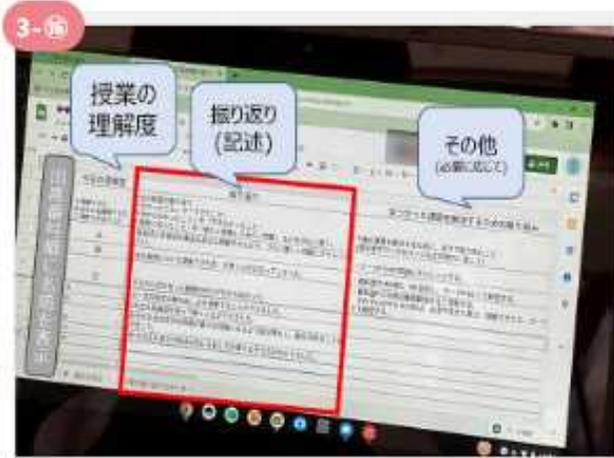
グループで話し合ったことを記録しておこう



「〇〇調べ」をひな形カードで蓄積



「1人1シート」を相互参照



振り返り活動で相互参照

デジタルかアナログかではなく、効果的な活用を



「徳島版読解力」を育成する学習のイメージ

各学習段階、学習場面〔A～E〕において「5つの力」を育成！

- ★ 全ての教科等での取組
- ★ 学習方法・ツールの工夫
- ★ 授業、授業外での繰り返し

〔授業〕

導入（個別学習）

- A 情報を正確に捉える
- B 読み取り、考えたことを書き表す

展開（協働学習）

- C 他者から、考えや表現の仕方を学ぶ
- D 交流を生かして考えを表現する

振り返り（個別学習）

- E 学んだことを振り返る

「徳島版読解力」の育成に必要な学習活動

〔授業外〕

身に付けた学び方を、新たな問題解決に活用する



授業は何のために行うのか



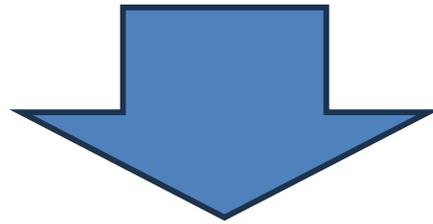
指導事項を育成するため



育成された子供の姿の想定



先生が教えこむ授業から



子供が学ぶ授業へ



初等教育資料 定期購読のご案内

学校、教育委員会の方々へ届ける文部科学省編集の月刊誌

最新の教育情報をいち早くお届け！

東洋館出版社HPでも電子書籍を購入できる！



令和6年度 今、改めて考える 子供の学びと各教科等の指導

- 「各教科等における指導の充実・改善」「校内における教員研修の充実」
- 「学校段階等間の接続を踏まえた指導」
- 「学級経営の充実」「個に応じた指導の充実」
- 「言語活動の充実を通じた授業の改善」「学校における安全教育的充実」



令和6年度年間テーマ：
学習指導要領の
よりよい実施に向けて

初等教育資料を読めば、

学習指導要領に基づく授業ができる！

東洋館出版社



初等教育資料

学習指導要領に基づいた
より確かな情報を発信する
文部科学省編集の月刊誌

編集：文部科学省教育課程課／幼児教育課
定価：770円（税込み） B5判・平均102頁

令和6年度のテーマは

「学習指導要領のよりよい実施に向けて！」

学習指導要領全面実施5年目を迎え、教育活動の更なる改善・充実を図るために、学習指導要領の進歩を実践において具体化するためのポイントを発信していきます。

特集Ⅰ：教育現場における最重要課題を理解するコーナー

- 4月号 各教科等における指導の充実・改善①(国語、社会、算数、理科、生活、音楽)
- 5月号 各教科等における指導の充実・改善②
(国語工作、体育、家庭、外国語、道徳、総合的な学習の時間、特別活動)
- 6月号 校内における教員研修の充実
- 7月号 学校における安全教育的充実
- 8月号 学校段階等間の接続を踏まえた指導①(幼児教育、国語、社会、算数、理科、生活、音楽)
- 9月号 学校段階等間の接続を踏まえた指導②
(国語工作、体育、家庭、外国語、道徳、総合的な学習の時間、特別活動)
- 10月号 地域社会との連携を生かした教育活動の充実
- 11月号 幼児教育と小学校教育の円滑な接続の推進・充実
- 12月号 個に応じた指導の充実①(国語、社会、算数、理科、生活、音楽)
- 1月号 個に応じた指導の充実②(国語工作、体育、家庭、外国語、道徳、総合的な学習の時間、特別活動)
- 2月号 言語活動の充実を通じた授業の改善
- 3月号 学級経営の充実



特集Ⅱ：学習指導要領に基づく確かな授業づくりに触れるコーナー

毎月、教科等ごとに学習指導要領に基づく授業づくりの考え方や授業実践を紹介しています。メインテーマは、その教科等では最も重要課題とされる事例を教科調査官自身がピックアップして特集します。教科等の確かな理解、最新の教育課題は何か、授業づくりの様々なヒントを得ることができます。